



さて、その翌日から授業が始まることになったわけだが、基礎過程2年は週の後半2日が実習にあてられる。2年からは基本的に実機を使うのだが、最初の数回の授業はチームの連携を確認するために、シミュレータを使う。俺たちのチームは、もう連携確認済みだったが、それは最新型のSF2Aでの話。実習で使うST1B、これはSF1B型宇宙艇の武装をダミーにした練習機なのだが、システムが旧式で、先に最新型に慣れてしまった俺たちには、ちよつと手強い相手だった。おまけに担当教師は、あの入学式当日に小言を食らったコワモテである。さんざんシゴかれたのは言うまでも無い。まあ、おかげで・・・と言うべきか、3回目くらいでは、そこそこうまくやれるようになってきたわけだが、システムの処理能力があまりないため、時々情報氾濫による混乱に悩まされていた。ジョージが苦勞してシステムを調整してくれているおかげで、どうにか俺たちはシミュレータ訓練のステージを終わらせることができたのだ。そして、実機訓練の初日がやってきた。

実習、とりわけ実機訓練の集合時間は早い。まず、朝7時に格納庫に集合して機体の点検、それからブリーフィング、そして実習開始だ。俺も含めてだが、うちのチームは朝にあまり強くない。というより、約一名、とても心配な奴がいるわけで・・・。そして、実機初日から、その不安は的中することになる。

「おっはよく、みんな早いねえ。ぎりぎりは私だけかあ」

と、集合時間3分前にケイが現れる。ここまでは、許容範囲だ、だが、問題は・・・。

「あれ、あいつまだ来てないの?」

「ああ、不安の中だ」

「あっちゃあ、ヤバくない? それ」

「分かり切ったこと言わないでよね。最悪よ!」

「ジョージ君、どうしたんでしょうね。さすがに今日は遅れたらちよつと・・・」

「またゲームで夜更かしじゃないの?懲りない奴よね」

「あ、でも、昨日の夜は、いつもの所にはいなかったよ、あいつ。いたら絶対、一緒に落ちさせたんだけど」

「じゃ、単なる寝坊かよ。何考えてんだ、あいつ」

というような会話をしている間に集合時間になってしまった。まずい、これは本当にまずいぞ。

「よし、全員いるな。各チームの機体割り当ては、一覧を流してある。それぞれ自分たちの機体の点検にかかれ」

例のコワモテ教師の声だ。まずい・・・、とりあえずバレないように取り繕えないものか。

「うちの機体は205か、とりあえず、何かしておかないとマズいよな」

「でも、ジョージがいないと、システムチェックができないよ。あいつのインターフェイスがないとメインコンピュータにアクセスできないし」

「とりあえず、ここに見つかるとまずい。とりあえず乗船してから、ジョージに連絡してみよう」

「そうね。また吊し上げられるのは、ご免だわ」

俺たちは、出来るだけ目立たないように、そーっと機体に向かう。だが、205と書かれた機体の前にいたのは、コワモテ教師だったりするわけで。

「お前ら、今日から実機だ。気持ちを引き締めて行け！ ん、どうした？ エイブラムスはどこだ？」

まずい、早々に気づかれてしまった。ここはなんとか・・・。

「あ、すみません、ちょっとお腹の具合が悪いみたいで、トイレに行ってます」

などと適当にごまかしてみるのだが。

「なんだと、実機演習の前に腹をこわしただと？ 体調管理は基本中の基本だろうが。お前らもここにいろ。戻ってきたらちょっと気合いを入れてやる」

「あ、でも、先に出来ることがあれば、しておいたらどうでしょう」

なんとか、この教師の目を盗んでジョージに連絡しないとまずい。

「しかし、そもそも、エンジンアリング担当抜きで何が出来るんだ？」

「あ、その・・・」

「システムチェック程度なら出来ます」

と美月が横から割って入る。そうか、こいつは、そういうインターフェイスを山ほど持っているんだって。

「星野、お前はパイロットだろう。エンジンアリングのかわりができるのか？」

「システムにはアクセスできます。機長の許可があれば、自動チェックシーケンスの開始くらいはできるので、時間を節約できます」

「ふむ、よかろう。中井と星野は、乗り込んで、先にチェックを始めておけ」

「わかりました」

よし、とりあえずなんとかなりそうだ。俺は美月と二人で宇宙艇に乗り込んだ。とりあえず、これでジョージと連絡が取れる。

「ケンジ、システムチェックを始めるから、機長席からアクセス許可を出して」

「わかった、・・・よし、美月のIDでアクセス許可を出したぞ。後はたのむ。俺はジョージと連絡を取るから」

「わかったわ。システムアクセス許可を確認。システム起動。自動チェックシーケンス開始」

俺は、美月がチェックを走らせている間に、コミュニケーターを使ってジョージを呼び出す。

「ジョージか？ 今どこだ」

「悪い、やっと格納庫に着いたところだよ」

「まったく初日から何やってる。急げ。それから、お前は腹を壊してトイレってことになってるから、聞かれたらそう言えよ。いいな」

「・・・」

「どうした？ わかったのか？」

「・・・」

どうしたんだろう、通話は切れていないが返事が無い。

「なるほど、そういうことか？」

と、いきなり後ろから太い声がした。

「なかなかのチームワークじゃないか、中井」

振り返ると、コワモテ教師。しかも、隣にジョージを連れてきている。手には、ジョージのものらしい、コミュニケーションターが……。こりや、万事窮すか。

「さあて、こうなれば全員同罪だが……。まずは、中井。リーダーのお前に申し開きの機会を与えてやろう。何か言うことはあるか？」

「あ、いえ、ありません。すみませんでした」

「素直でよろしい……と言いたいところだが、世の中はそれほど甘くない。そもそも、実機演習初日から遅刻する奴も奴だが、適当にごまかせば何とかなるなんて思っている奴らが一番気に食わん。そもそも、お前は……」

教師がそう言いかけた時、アラーム音。

「なんだ？」

「システムチェックでエラーが出ています。内容は……」

美月が答える。

「機制御系の自己診断エラーみたいですね。スタビライザーがうまく働いていないようです」

ジョージが付け加える。

「なんだと。まったく、お前らが、ろくでもないから機体にまで嫌われたか。この機体は整備行きだな。今日は実機なしだ。これから反省文でも書いて持つてこい」

「そんな……、代わりの機体はないんですか？」

「残念だが、今使える機体はこれしかない。あきらめろ。自業自得だ。さあ、降りた降りた」

俺たちは追い立てられるように外に出る。実機演習はお預けか。

「ごめん、僕のせいで・・・」

とジョージがすまなさそうに言う。

「いや、俺が下手な芝居を打とうなんて考えたのが悪かった。申し訳ない」

「ま、故障じゃ仕方ないよ。ジョージもこれに懲りたら、遅刻癖を治しなさいよね」

仕方が無い、これから教室にでも行って反省文でも書くしかないな。と思つて歩き始めた時だった。そこにフランクが現れた。

「どうした、何かあったのか？」

「いやな、こいつら実機初日から遅刻しやがった上に、それを適にごまかそうとしたわけだ。おまけに機体も故障ときた。お前さんの生徒ときたら、どうしたものやらな」

「そうか、それは申し訳ないな。担任の責任で厳しく指導しておくから、こいつらは俺に任せてくれないか」

「よかろう。きっちり絞めといてくれ」

「わかった」

コワモテも苦手だが、担任教師のフランクに迷惑をかけてしまうのは申し訳ない。だが、これからどんなお説教が待っているのだろう。ちよつと気が重い。

「よし、それじゃ全員こっちに来い。これから罰として、ひと仕事してもらおうぞ」

「あれをやらせるのか？」

「そうだ。まあ、こいつらにはおあつらえ向きの仕事だがな」

なにやら物騒な会話である。フランクは俺たちに行ったい何をさせるつもりなんだろう。俺たちは、フランクについて、格納庫の奥に歩いて行く。なんとなく気が重いのだが・・・。

「ところで、どうして遅れたんだ、エイブラムス」

「すみません。ちよつと今日の準備をして遅くなってしまつて・・・」

「ほお、何を準備していたのかな？」

「このチームのプロファイルを反映させた情報フィルタプログラムを書いてたんです。S T 1 Bは処理能力が足りないんで、僕らのチームには少しきついんですよ」

「あれ、ゲームで夜更かしじゃなかったんだ」

「ひどいな、さすがに僕でも実機初日にハマったりはしないよ」

「そうか。その心がけは悪くないが、遅刻しちゃだめだろう」

「すみません。やり始めたらちよつと欲が出て、あれこれ手を入れていたらつい・・・」

そういうことだったのか。ジョージは俺たちのために、あれこれ頑張ってくれていたんだな。

「ところで、先生、俺たち何をすれば・・・」

「ちよつと、君たちには、罰として実験台になってもらう」

フランクが笑いながら言う。

「実験台？　ちよつと不気味な響きがするんですけど・・・」

「まあ、見れば分かるさ・・・、ほらそこだ」

フランクが指さした方向には、銀色の宇宙艇。機体には子馬のマークが入っている。

「これって・・・」

「ペガサスⅡじゃないですか！」

「そう、いや、正確にはS T 2 A、つまりペガサスⅡの同型練習機だ。愛称はポニーⅡというんだが。最近できたばかりのプロトタイプさ」

「練習機だから、ポニー（子馬）ですか？」

「まあ、そんなところだ。で、これからこいつの試験をするんだが、君たちにはそれを手伝ってもらう」

「マジ・・・ですか？」

「不満か？」

「と、とんでもない。やります」

なんと、実験台ってのは、こいつのテスト飛行につきあえということだったのか。罰どころか、願ってもないチャンスだ。どうやら、例のコワモテもグルだったらしい。しかし、どうして俺たちなんだ？

「でも、これアカデミー専門課程の訓練用ですよ。そのテストに私たちなんかでいいんでしょうか？」

とマリナがちょっと不安そうに言う。

「残念ながら、専門課程の学生で、これを動かせる奴がいないのさ。まだ、シミュレータもテスト段階でね」

「って、それは私たちも同じ・・・ですよね」

「何を言ってるんだ。君たちは、もうこの機種の、というより、こいつの親分でシミュレーションしてるじゃないか」

「え？」

「いやあ、正直言うと、あのシナリオをクリア出来る奴らがいるとは思わなかったんだがね」

それって、まさかあのゲーセンの？

「もしかして、僕らがゲーセンでやったシミュレーションのことですか？ やけにリアルなシミュレーションだなと思ったんですけど」

と、ジョージが先に切り出す。

「君は知ってるよな。あのデータがアカデミーから提供されていることは。そしてその目的も」

「はい、・・・って言っているのかな・・・」

「君らがやったシナリオは、実際の訓練用のプロトタイプをゲーム用に少し手直したものだ。しかし、君は私が入れておいた制限を全部外したばかりか、とんでもない武装強化までやってくれたわけだが」

「じゃ、あの最後のは？」

「ああ、あれは私からのプレゼントだ。君らがあまりに楽しそうだったんでね」

なんてこった。あれは全部アカデミーに筒抜けだったのか。それに、最後の小惑星もフランスの仕業だったとは。

「まあ、このことは他の生徒には内緒にしておいてくれ。変に意識されると、データに偏りが出てしまうからな」

「でも、実機初日にこれに乗れるんだ。夢みたいだね」

「これなら処理能力も問題ない」

「ほんと、すごいです」

「あ、あんたたち。浮かれてるんじゃないわよ。シミュレーションと実機じゃぜんぜん違うんだからねっ！」

そう言う美月もずいぶん嬉しそうじゃないか。

「うむ、星野が言うとおりで。訓練は基本動作からじっくりやるからな。当分アクロバットは禁止だ。もちろん、システムの書き換えも禁止だぞ、いいな」

ジョージが苦笑いしている。こいつはまた何か企んでいたようだ。

「よし、それじゃ乗り込んでシステムチェックからだ。手順は分かってるな。ブリーフィングはその後、機内でやろう」

「わかりました」

なんだか、夢みたいだ。練習機とはいえ、これは最新鋭機。それを俺たちが実際に飛ばせるなんて。たぶん、みんな同じ気持ちだろう。顔を見ていれば分かる。

「なにボーツしてるのよ！ 行くわよ」

「あ、ああ」